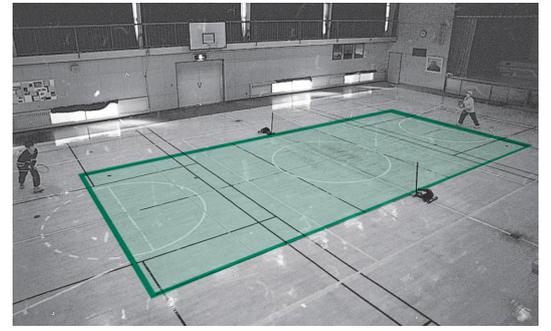


表通り裏通り

目が見えなくとも テニスが したい！

20年ほど前、視覚障害者向けに、ボールや競技方法をくふうした「視覚ハンディキャップテニス」という競技が考案されました。誕生の舞台となったのは、県立盲学校。同校生徒の発案から試行錯誤を経て生まれたこの競技を、現在全国で300人以上が楽しんでます。



コート（着色部分）は、縦13.40m、横6.10m。ネットの高さは両サイドで0.85m、中央部で0.80mあります



英国の視覚障害者の皆さんに「視覚ハンディキャップテニス」の楽しさを体験してもらうために、1月にロンドンスポーツフォーラムで、デモンストレーションを行う山本さん

このテニスは、視力によってバウンズの数が異なります。例えば、全盲の競技者はボールが三バウンドするまで打ち返すことができます。試合は、サーバーが「行きまっす」と言い、レシーバーが「はい」と返事をしてから始まります。独自に開発した、音が出るボールを使用するだけでなく、視覚に障害のあるプレーヤーが自分の位置を足や手で確認できるように、ラインの下にたこ糸などを通して突起させています。

「初めのうちは、バウンドをイメ

ージすることが難しかったですね」と話す、全盲の現役選手であり日本視覚ハンディキャップテニス協会の長の山本栄治さん（51歳・笠幡）。音を頼りに、瞬時に頭の中で二次元の世界を作り出して、ボールを打ち返す。難しいことですが、初めてラケットにボールが当たったときの喜びは大きかったそうです。

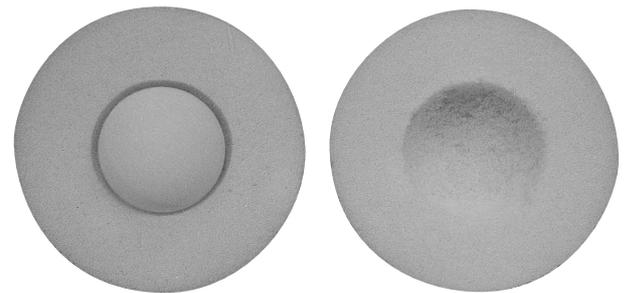
この競技を知ってもらうために、平成十四年にオアシスで教室を開催し、六十三人が参加。そして市内だけでなく、全国三十以上の都道府県で講習などを行いました。さらに、一月には英国で子ども向け講習会を二回、模範試合を一回行いました。英国には視覚障害者向けのテニスは



「けっこう瞬発力が必要だし、ラッチが続くと息が切れますね」。練習後の会話には、運動したあとの爽快感が感じられました

なかったため、たいへんな歓迎を受けました。終了後は、講習会に参加した皆さんがこれからもプレーを続けることができるように、ボール八十個を進呈してきました。

「この競技は動く範囲も狭く、ボールもポンジでできているためスピードが出ません。自分で体を動かすことができる人なら、子どもから高齢者まで、障害の有無にかかわらず楽しむことができます。将来的にはボールを改良したり、指導方法を確立したりして、たくさんの人にこの競技の楽しさを伝えたいですね」と、山本さん。「視覚ハンディキャップテニス」が、世界じゅうで行われる日を楽しみにしています。



この競技のために開発したボール。スポンジボールの中をくり抜き、視覚障害者用卓球のボールを入れることで、弾むとマラカスのような音が出ます。直径は約9cm。スポンジなので、体に当たっても安全です

湯を浴びて無病息災



これが「湯花用大釜」

1月14日、古尾谷八幡神社（古谷本郷）で湯立祭が行われました。この祭りは、平成11年に発見された「湯花用大釜」（市指定文化財）の記録を基に、同13年に復活しました。沸かした湯の中にササの束を入れ、付いた湯を無病息災を願う皆さんに振りかけます。来年以降、この祭りは1月の第3日曜日に行われます。



湯を浴びる地域の皆さん。ササを振ると湯が冷やされて、周囲は真っ白に



出来上がった小豆がゆにヨシの筒を浸します。この小豆がゆを食べると、虫歯にならないそうです（左）ヨシを割って、米粒の数を数えます（上）

こしは風が、よく吹くそうです

18本のヨシをすだれ状に編み、筒状に束ねた物を小豆がゆに浸し、茎の中に入った米粒の数によってこしの作柄と天候を占う、市指定無形民俗文化財「筒がゆの神事」。1月15日の早朝、藤宮神社（石田）で行われました。その結果、小麦・小豆・稲などが豊作、大根やソバなどが平年並み。天候は、日照が少なめ、風はよく吹き、雨は平年並みとなりました。最後は、訪れた皆さん全員で小豆がゆを食べました。

もち+たこ=子どもたちの笑顔

1月21日、川越市青少年相談員協議会が主催する「新春！ 親子凧揚げ・餅つき大会」が、農業ふれあいセンターで行われました。当日は36人の親子が参加。まずは真剣な表情で、たこ作りを始めました。もちつきの前には、蒸したばかりのもち米を試食。ついたたてのもちを食べたあと、たこ揚げで走り回る子どもたちの、笑顔と歓声が印象的でした。



おいしいおもちになあれ



揚がったよ！



保存会の皆さんと将来を担う子どもたち

一人前になるには、二年ほどかかります。同保存会では、後継者育成のため、十五年ほど前から、地域の中学一年生にもちつき踊りを体験してもらっています。この体験がきっかけで、成人になり、入会した方もいるそうです。「先人が築き上げてきた伝統芸能を、末永く継承していきたいですね」と同保存会会長の宮澤辰雄さん（66歳）。これからも、もちつき踊りは、脈々と受け継がれていきます。

「南大塚の餅つき踊り」保存会の皆さん「南大塚の餅つき踊り」保存会は、県指定無形民俗文化財に指定されている「南大塚の餅つき踊り」を守り続けています。もちつき踊りは、大正末期から戦時中まで中断していましたが、昭和三十年ごろ、地域の皆さんによって同保存会を結成し、再開しました。現在の会員は三十七人、全員が南大塚在住です。練習は、月二回、もちに代えてわらを使って行っています。歌い手に合わせてもちをつくため、リズム感を養うことが大事。一人前になるには、二年ほどかかります。同保存会では、後継者育成のため、十五年ほど前から、地域の中学一年生にもちつき踊りを体験してもらっています。この体験がきっかけで、成人になり、入会した方もいるそうです。「先人が築き上げてきた伝統芸能を、末永く継承していきたいですね」と同保存会会長の宮澤辰雄さん（66歳）。これからも、もちつき踊りは、脈々と受け継がれていきます。



かわごえ
川越
びと
32